

緑色の時計

小川未明

青空文庫

おじさんの髪は、いつもきれいでした。そして、花畑でも通つてきたように、着物へでもでかけるときか、あるいは、どこか遠くから、いま、汽車でついたばかりのように、その目はいきいきとしていました。

事実、おじさんは、方々へでかけたし、ぼくたちの知らない町で、めずらしいものを見たり、いろいろの人々とあつて、聞いたおもしろい話を、ぼくたち兄弟にしてくれたのでした。

ある日のこと、

「ぼく、望遠鏡が、ほしいな。」といったのです。すると、おじさんが、

「じゃ、いい望遠鏡を、さがしてやろうかな。」といいました。

「遠くが、見えるんだよ。」

「船乗りが、持つようなのさ。」

「そんなの、あつても、高いだろう。」

「なに、出ものなら、たいしたことはない。」

こんなぐあいに、おじさんの口から聞くと、なんとなく、はや、自分は、のぞみを達したもののように、うれしくなるのでした。

また、ある日のことでした。弟が、

「どこかに、スケートのくつが、ないもんかな。」と、思いだしたように、いいました。

「なに、きみは、スケートができるのかい。」と、おじさんが、聞きました。

「おけいこをしたいんだよ。」

「そんなら、S町の夜店へ行ってごらん。あのへんには、外人の家族が、たくさんきているから、出ないともかぎらない。」

まったく、雲をつかむような話なのだけれど、おじさんのいうことを聞くと、なんとなく、そうかもしれないと思うのです。

「S町へ行ってみるかな。」と、弟が、いいました。すると、おじさんが、

「この時計も、あすこの露店で買ったのだ。スイス製のなかなか正確なやつで。」と、おじさんは、時計をうでからはずして、ぼくたちに見せました。

ぼくは、まえから、いい時計だと思っていたのでした。形がめずらしく、長方形をして、緑色のガラスが、はまっています。手にとってみるのは、はじめてだけ

ど、するどい、ぜんまいの音が、チツ、チツとしています。

「ほかに、いいのを見つけたら、これを正ちゃんにあげるよ。」と、おじさんは、わらいながらぼくの顔を見ました。ぼくには、思いがけないことだったので、

「ほんとう？」と、聞きかえました。

「ほんとうとも。だが、すぐではないよ。いいのを見つけてからだぜ。」と、おじさんは、いいました。

あとで、このことをねえさんに話すと、

「そんなこと、あてにしないほうがいいわ。」と、ねえさんは答えて、せっかくのぼくのよろこびをうちけしました。

「じゃ、うそだというの。」と、ぼくは、ねえさんにせまりました。

「だって、あの人のいうことは、いつもゆめのような話じゃないの。」

そういわれれば、そんなような気もするけれど、ぼくは、おじさんの話には、いつもひきつけられるのでした。

「正ちゃんは、うそをつくような人でもすき？」と、ねえさんが、聞きました。

「ぼく、うそをつくような人は、大きらいだよ。」

ほんとうをいえば、ねえさんも、ぼくも、真におじさんが、まだわからなかつたのでした。

春風の吹く、あたたかな晩がたでした。弟は、S町の露店へ、いつしよにいつてくれというのでした。二人は、電車に乗って、でかけることになりました。駅の近くの花

屋では、花の咲いている、ヒヤシンスの鉢が、ならべてありました。

弟は、電車の窓から、外をのぞいて、

「にいちゃん、いなかのようなところを、通るんだね。」といいました。ぼくは、つりにいくとき、よくこのあたりを歩いたけれど、弟は、いままで、こちらへきたことはなかつたのです。

S町へつくと、もう暗くなりかけていました。大通りには、あかりが、ちかちかと

ついて、お祭りでもあるようでした。なるほど、たくさん露店が出ていました。けれど、

一つ、一つ、見ていくけれど、子どものおもちやとか、日用品とか、食べ物のようなもの

のばかりで、望遠鏡や、時計のようなものを売る店は、見つかりませんでした。まれ

に、お勝手道具や農具などをならべたものがあつたけれど、スケートのくつをおくような

店は、見つかりませんでした。

ぼくのさきになって、歩いていた弟が、ふいに、

「にいさん。」と、ぼくをよびました。ぼくは、いそいで、弟に追いつきました。

ちようど、露店のおわりかけたところに、古ぐつや古げたをむしろの上へつみあげた店
がありました。弟は、その前へ立って、ねっしんに見ていましたが、小さな声で、

「ちよつと、あのおばあさんの手をごらん。」というのでした。

うす暗い、かたすみのところに、みすぼらしい年とつたおばあさんが、かたちんぼの古
げたをよりわけて、あれか、これかと、くみあわせてみているのでした。おばあさんは、
そのことに、まったくむちゆうでした。そしてつめをいためたのか、指さきから、赤く血
がながれていました。これを見たとき、さすがに、ぼくは、世間には、こんな生活もあ
るのかと考えられて、なんとなくいたたまらない気持ちがありました。

「さあ、もう帰ろうよ。」と、ぼくは、弟をうながして、二人は、さつききたときの道を
もどつたのであります。

星の光が、うるんで見える晩でした。家へつくと、つかれて、がっかりしました。

「おじさんは、うそつきだね。」と、弟は、憤慨しました。

「あの、S町で、なかつたかもしれないよ。」と、ぼくが、いいました。

「どうして。」と、弟は、いぶかしそうに、問いかえました。

「だって、あのあたりに、外国人なんか、いそうもないじゃないか。」

そう、ぼくが、いうと、なるほどそうだねと、いわぬばかりに、弟は、頭をかしげながら、

「こんど、おじさんがきたら、よく聞いてみようね。」といいました。

そののち、どうしたのか、しばらくおじさんは、見えませんでした。ある日のこと、とつぜんおじさんが、病院でなくなられたという知らせがありました。これを聞いて、みんなが、どんなにおどろいたかしれません。

「まあ、あのおわかさで、なんのご病気でしたでしょう。」と、おかあさんは、なみだぐまれました。

「いつも、ほがらかな、方でしたのに。」と、ねえさんが、いいました。

「あれで、なかなか考えぶかいところがあつて、将来のある人と思っていたのに。」と、おとうさんは、おしまれました。

おとむらいの日には、おとうさんが、いられました。ぼくは、そのとき、往來で遊んでいて、いまごろ、おじさんのたましいは、天へのぼるのだらうと、まろやかに、よく晴

れわたる空をあおぐと、めずらしい金色の雲が、いくつとなく、あちこちに飛んでいました。

「いいおじさんだったがなあ。」と、ぼくは、もう二度とあわれぬのをふかくなしみました。

家では、とうぎ、よくおじさんの、うわさがでました。

「いい人だったけれど、あんまり話がちようしよくて、信用がされなかった。」という意見もありました。そんなやさきへ、小さなはこが、おじさんの遺族から、ぼくのところへとどけられたのです。さつそくあけてみると、いつか、おじさんが、ぼくにやくそくをした、緑色のガラスのはまった、長方形の時計でした。

これを、おじさんが、ぼくにやってくれといいのこされたというのです。このことは、みんなを感激させました。

「ごらん、おじさんは、うそつきでないじゃないか。」

ぼくは、みんなの前でいばりました。そして、このとき、まごころというものが、いかとうといものであるかを知りました。また、日がたつにつれて、その人にたいする尊敬の、だんだんたかまるのがわかりました。

いま、ぼくのつくえの上うへに、おいてある時計とけいがそれです。カチ、カチと、時ときをきぎむ音おとがしています。それを聞きくと、

「きみには、わたくしの心こころがわかってもらえる。」と、おじさんが、いつているようです。そして、たえず、かたわらで、ぼくをばげましてくれるのです。

「みんなをよろこばせ、みんなをしあわせにするために。」

そうだ、ぼくが、美うつくしい詩しを書かき、りっぱな発はつめい明めい家かとなったとき、おじさんのたましいは、よろこんでくれるだろうと思おもいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「みどり色の時計」新子供社

1950（昭和25）年4月

初出：「幼年ブック」

1948（昭和23）年6月

※表題は底本では、「緑色《みどりいろ》の時計《とけい》」となっています。

※初出時の表題は「みどり色の時計」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2020年2月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

緑色の時計

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>